

福島第一原子力発電所の事故の分析に関する原子力安全・保安院の報告書、昨年8月に東電が公開した進捗報告書などを精査した結果、NHKが3号機の5回目のベントで地元を汚染したと言っていた事象は、物理的には起こりえない事象であることを確認するとともに、同じ時間帯に発生した、2号機の原子炉から格納容器に多量の放射性物質が放出されたことが原因である可能性が極めて高いことを確認しました。

この根拠となるデータは、15:25に格納容器のなかの放射線量が急増したCAMSのデータがあり、これと格納容器の中の圧力が急上昇したあと低下していく実測値も残っています。モニタリングポストでの測定値は風向きの影響を受けますが、CAMSのデータと格納容器内圧の実測値という確実な証拠から発生源を確認しました。

我々の検討した結論として、NHKは3号機の5回目のベントだと主張し、イタリアのSIET社の大型試験をして、また海洋大学の小規模な模擬性の無い実験をして一見尤もらしい番組に仕上がっていましたが、実は、3/15の午前中に格納容器が損傷した2号機で、午後に原子炉圧力容器内の炉心溶融物から発生したヨウ素やセシウムが格納容器に多量に放出されたものです。

また、3号機で消防車の注水で影響があったのは、3/13で、添付の資料の1ページ目の時系列事象を表した図のとおり、3/15には、金属ジルコニウムは全く残っていません。

従って、3/15の消防車による3号機の注水の寸劇などは完全に的外れとなり、既に金属ジルコニウムが無い炉心に消防車から少量の水をかけて、水-ジルコニウム反応が原因で炉心の損傷が進んだという炉心のメルトダウンの映像を流しているのですから、メルトダウン5の番組は、ほとんど最初から終わりまで全編が実際に起こりえないということになります。従って大げさな3次元CGで示した3号機の炉心溶融は、3/13に起こっていたことになり、エネ総工研のSAMPSONの解析は、2日もずれていて、現実と異なることになります。NHKに反省を求めたいのは、一部の専門家だけの意見にもとづき、十分な学会レベルの確認をしないで番組を構成していることです。

(参考に過酷事故連鎖のまとめ、および東電進捗報告を次頁に示す)

福島第一発電所過酷事故の連鎖のまとめ



東京電力 第2回進捗報告(平成26年8月6日)

..... 15日朝方に2号機のブローアウトパネルから蒸気が放出されていることが確認されていること、モニタリングカーの線量測定値が上昇していることから、午前中のうちに圧力低下が発生した可能性が高い。この際のFP放出が飯館村などの汚染に繋がっていると考えられることから、この格納容器圧力低下がどのようなメカニズムにより発生したかを検討しておく必要がある。(2号機-11)

また、3月15日の朝方からのCAMS(D/W)の指示値を見ると、15日6時頃まで単調に増加していた指示値(6時20分、63Sv/h)が、6時間程度の測定データの空白期間を経た後、15日12時頃には低下(11時25分、46Sv/h)していることが確認できる。これは、格納容器圧力が低下していることから、FP

3/15の6:20に2号機のCAMS値63Sv/h、
11:25に46Sv/hに減少(1回目の
多量漏えい)

3/15の15:25に2号機の格納容器ドライウェルの線量が急上昇

が格納容器から放出されることにより格納容器内の線量が低下したことを反映したものと考えられる。その後、15日15時25分にはCAMS(D/W)の指示値が135Sv/hに急上昇していることが確認できる。この急上昇は原子炉、格納容器内での急激な状況変化を反映したものである可能性があることから、この時点でどのような現象が発生しうるのか検討する必要がある(2号機-12)

3/15の15:25に2号機の
CAMS値135Sv/h、
(2回目の多量漏えい)格納容器D/W内
圧急上昇後、急激に
低下